

## 研究成果

松王は、科研費の研究課題でもある「科学者の価値判断」に関して研究を進めている。1950年代のR. Rudner, R. Jefferyの論争に始まり、今日のDepistemic values, non-epistemic values論争（value-free論争：科学における価値判断は真理探究に関わる価値判断に限定されるか否かに関する論争）に至る、科学哲学の論争史を整理するとともに、今日の具体的な科学研究の中で、こうしたテーマに関わる部分を探り出し、分析を行っている。特に、気候変動科学（地球温暖化科学）に関して、気候学者らとの討論を通じ、IPCCが示すような政策立案のための「シナリオ型」資料には、すでに一定の価値判断が織り込まれていることや、一部気候学者らに見られる（緩和か削減かという議論がある中で）「温暖化ガス削減」を喫緊の社会的責務とするような論調に対し、科学者は社会の議論を一定方向に誘導すべきではないが、社会が価値判断を行う「タイミング」については、これを指示する立場にある（指示する「責任」がある）ことを論じた（STS特別シンポジウム、およびシンポジウムに関連した論文）。また、3.11後の地震学会の動向を調査する中で、従来政策立案者の原則とされる「予防原則」が、とりわけ防災やリスク回避に関わる科学においては、科学者の判断にも含まれるものであることを論じた（応用倫理研究会）。松王はほかに、昨年E.ソーバーの翻訳（『科学と証拠』2012,名古屋大学出版会）後、統計哲学についてもさらに研究を進めている。とりわけ、ソーバーらの赤池情報量規準（AIC）に関する哲学的考察（AICが実在論と反実在論の論争に関して、両者の対立を回避する新たな視点を与えるとする考察）について、さらに研究を進めており、彼らの主張が、BIC（ベイズ情報量規準）とAICの比較に関して、特定の条件に依存するものであることなどを明らかにした（統計哲学研究会で発表）。院生の研究成果は次のとおり。まず新納は、彼女の一番のモチーフである「看護学におけるケアリング論の限界」について、研究を進めている。今日、看護学を支える重要な哲学的根拠の一つに「ケアリング」概念があるが、この概念（たとえば、ノディングスのケアリング概念）はケアするものとされるものの相互理解が前提とされており、特に司法看護のような犯罪者や精神障害者を対象とする看護の場では適用できない。もしケアリングがこれらを含むものなのか、この点について倫理的視点での理論的考察、および実地の問題に関わる中での実践的考察を行っている。小野田は引き続き一般相対性理論について、これが、アインシュタインが当初掲げたマッハ原理に即して展開されるとすればどのような形になるか、考察を続けている。併せて、時空の「実体説」「関係説」の哲学的論争について、これが一般相対性理論の理解に関わっていく意味をもつかの整理を行っている。会場は哲学的「因果」論争と、社会科学（特に政策科学）における「因果」論争の関係について整理し、とりわけ後者が前者から得ることのできる示唆について考察を行い、修士論文「科学哲学の視点からみる、社会科学における因果的推論」をまとめた。要旨は次のとおり。〔社会科学の方法論には、定量的手法と定性的手法とがあり、両者の分裂が続く中で、統一的な研究指針の登場が待たれている。定量的手法は事例の数を増やすことで統計的に研究を行うものであり、定性的手法は少数事例を丹念に追跡することでそのメカニズムを明らかにしようとするものである。両者の対立は、因果的推論をどのようにして行うか、という点にひとつの大きな亀裂として現れるが、この因果的推論の対立を科学哲学的視点でもって整理することを試みる。まず反事実条件法に代表される論理的定式化と、Salmonの因果論に代表される機械的定式化を中心に科学哲学上の因果論の経緯を概観した後に、定量的手法が反事実条件法の、定性的手法がSalmonのマークメソッドの方法論をそれぞれ基礎的に内包していることを示す。その後、CartwrightによるSalmonのマークメソッドへの批判を定量的手法の研究者からの因果的メカニズムへの指摘と合わせて考察した上で、定性的研究者がその指摘に十分に対処できているか考察する。〕今年度新たに修士課程に入学した草野、本間は次のようなテーマで研究を進めている。草野は哲学者ポストロムの有名な「シミュレーション論法」を題材とし、そこで述べられる「この世界はポスト・ヒューマン世界のシミュレーションである確率が高い」という主張に関して、その後の多くの批判的論者の視点を参考にしつつ、

より強い批判的視点が確立できないか探っている。本間は松王の研究テーマに近い「科学者の価値判断」について関心を持っており、具体的な科学事例として、ダム放流に伴う漁業被害についての因果性有無をめぐる科学的判断と価値判断の関係（「黒部川ダムの排砂」に関わる問題）を取り上げて考察を進めている。